「宿屋」では女形の名人紋十郎が、サワリで朝顔が盲とは思へぬ位よく動いたので、すつかり寒心（これは誤植なり）した。私だつたら一層のこと庭石につまづいて倒れる型を入れてやるがなと思つた。又、大井川で朝顔が「なう川越達」と絶叫するが、あの水勢の殊に強い、川幅の廣い大井川の向ふ岸にゐる川越にいくら怒鳴つても聞える筈はなし、第一「言ふ聲さへも息切れの」朝顔がそんなに怒鳴れる譯もなし、あれはこちら岸に居る川越に向つて言ふのであつて、それでこそ哀れさも増し、「笑止笑止」と行き過ぎる原作も生きて來るのであるが、義太夫も人形も芝居も皆怒鳴つて、向ふ岸に人足を出してゐるのは不思議である。

「彌次喜多」は榮三が絶品で、淨瑠璃の輕い味も捨てたものではない。織太夫の彌次郎兵衛も當り役で傑作だが、最近では本人が照れてゐる氣味があるのは不可ない。但し、織太夫と云ひ、猿之助と言ひ、兎角「新人」に彌次喜多がつきものであるのは不思議の因緣とでも申すべきであらうか。

うそくらぶ

北支滿洲巡業で、十二圓五十錢の入場料を取つた市川猿之助は、有樂座での春秋座公演が、東寶劇團の應援を得て、僅か三圓の入場料であつたのに鑑みて、いよいよ支那へ移住する決心をした。